只見短歌会　四月詠草

大塚栄一　指導

色違ふチューリップなど活け透析のなき日の夫は穏やかにみる　古川　英子

書き終へし文字嬉し気に見せてみる入学したての曾孫に拍手す　目黒　富子

病重き友を見舞ひて握る手の返す力の弱きが悲し　馬場　八智

茎立ちの緑の畝に降りかかる名残雪見る白き花のごと　関谷登美子

浅雪に春早けれど遅霜の下りし山の木々未だ芽吹かず　新国由紀子

淡き雪日に照りながらただよへる町を気ままになりて歩むも　小倉キミ子

広辞苑も大辞林をも用なさずスマホがあれば何でも事足る　渡部ゆき子

下を向きスマホ片手に歩きみる若者多きは時の流れか　渡部ヨリ子

降る雨に寂しさつのり窓開けて餌欲(ほ)りてみる鳥に声かく　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　五月例会

目黒十一　指導

木の根明く街道に沿う会津桐　礼

空樽を積む北窓を開きけり　順子

曲り家の屋根にペンペン草しげる　吉児

山鳥の尾羽池塘に浮くしじま　都

うららかや豚の乳首の塞がりて　修一

草餅やもと酒蔵の喫茶店　味代子

固巻の葉っ葉ツノ出すチューリップ　一穂

入園児鐘の前に百面相　恒夫

除染せし浜の実家や木瓜の花　敦子

軒先に種芋囲み村の人

夏きざし玄関先は花だまり

岩魚釣るこの流れにも涙あり

新茶汲む先に香りの届きけり

堰上る水頭より田の湿り

声出せば押し寄せて来る夏の山

観音の視界を領す植田かな

芽柳や乳色となる只見川

春爛漫白寿の翁を祝う歌